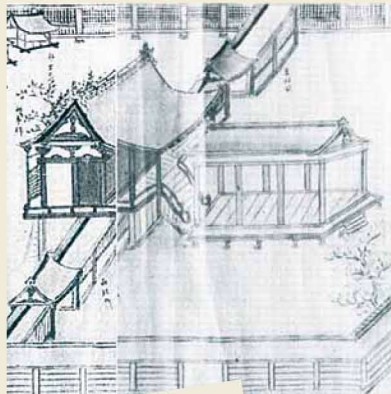


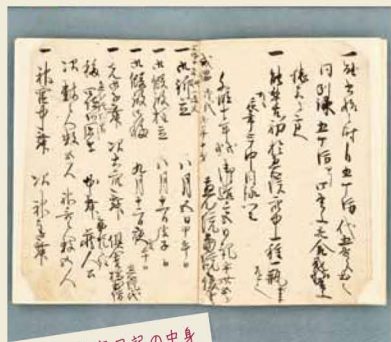
二荒山神社の式年遷宮祭 宇都宮氏の威信をかけた祭

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司



中世の二荒山神社社殿の様子

(大洲市宇都宮神社蔵「愛媛県大洲宇都宮神社日光山縁起」(三宅千代二編)より転載)



文明12年の造宮日記の中身

平成二十五年は、伊勢神宮で二十年ごとの式年遷宮祭が行われ、出雲大社では六十年ごとの大遷宮祭が行われた。日本を代表する二つの神社の式年遷宮祭が行われたおかげで日本中が遷宮祭で湧いた。式年遷宮祭とは、一定の期年において社殿を造り替え、これに神体を移す祭りである。由来は、もともと木造掘つ立て柱造りの粗末な社殿ゆえに傷みやすく、そのために社殿を造り替えたといわれるが、神霊の再生復活を期待して行われたものとも考えられる。したがって式年遷宮祭は、本来、大なり小なりどの神社でも行われたものである。

平安時代後期ころから戦国時代末期まで、宇都宮一帯を治めた宇都宮氏の棟梁は、宇都宮大明神(二荒山神社の旧名)の社務職を兼ね、宇都宮大明神の神事祭礼の執行をはじめ大明神に関するさまざまな任務を掌った。そうした宇都

宮大明神に関する任務の中でも式年遷宮祭は、取り分け重要な任務であった。そのことは、鎌倉時代に制定された宇都宮氏独自の家法である「弘安式条」の第一条に、「当社修理事」と式年遷宮祭のことが真っ先に書かれていることから窺える。

宇都宮大明神の式年遷宮祭の様子を示す資料に「造宮日記」と「慈心院造宮之日記」がある。前者には永享二(一四三九)年、長祿二(一四五八)年、文明十(一四七八)年、明応七(一四九八)年、後者には天文七(一五三八)年の記録があり、二十年ごとに式年遷宮祭が行われていたことがわかる。

ここでは式年遷宮祭のことが最も詳しく記録されている文明十年の記録を紐解いてみたい。八月五日御新立とある。新立とは手斧の類をいうことから、新立とは、建築初めの儀式をおこなったというわけである。八月十一日御仮殿の柱立、九月十二

日に神体を御借殿に移し、併せて御子舞、大衆舞、神官の舞、神主の舞が奉納された。十月四日能書始、十月十日新殿の柱立、二十二日には棟上が行われている。新殿の完成も間近なようだ。新殿への神体の遷座にあわせて奉納される田楽舞の稽古が十二月一日から始まる。十二月五日には、社頭において神官能が行われ、翌六日には坊中の能あるいは田楽舞などが奉納された。両日の芸能は、長時間にわたり盛大、かつ華やかなものであった。おそらくこの間に新殿へ神体の遷座が行われたものと思われる。

遷宮は八月五日から始まり十二月六日までの短期間で終了している。神殿は、現在のような彫刻を施した立派な造りではなかったと思われるが、それでも多くの職人を動員して建築にあたらせたに相違ない。また、芸能においては能はもとより白拍子、田楽舞など中世を代表する芸能が演じられている。一方、演者については、神官をはじめ大明神に付属する寺の僧侶や宮仕といった下級神職など大明神あけて参加し、宇都宮氏においても一族郎党あけて加わり、田楽舞に置いては日光山の僧侶の協力を仰いでいる。宇都宮大明神の式年遷宮祭は、まさに宇都宮氏の威信をかけて行われたものであった。

慶長二(一五九七)年、宇都宮氏は、秀吉によって改易の憂き目にあり、式年遷宮祭も途絶えた。